



北海道教育大学旭川校学生のジェンダー観と男女平等に関する被授業体験の意味(その2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 内島, 貞雄, 小林, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005442

北海道教育大学旭川校学生のジェンダー観と男女平等に関する 被授業体験の意味（その2）

内島 貞雄・小林 純子*

北海道教育大学旭川校幼児教育学教室

*学校法人御西学園百華幼稚園

Ⅱ 結果と考察（続）

1. 男女平等についての認識
 2. 家庭教育の実態と性別役割分業意識
 3. 「女らしさ、男らしさ」の意識と自分の性への考え方
 - ① 「女らしさ、男らしさ」の考え
 - ② 「女らしさ、男らしさ」の意識の形成
- （以上前号）

③ 自分の性に対する意識

次に、女または男に生まれて、納得できないと思ったり不条理だと感じるかどうかを、学校、家庭、異性とのかかわり、その他の4つの場面に分けて質問し、その内容についても回答してもらった。

[学校における経験]

学校についての結果は表16-1に示す。「全くない」が多く、女子学生が79.5%、男子学生が92.0%となっているが、「よくある」と「ときどきある」を合わせた回答は、女子学生では20.5%、男子学生で8.0%と、男女の間で差が見られる。内容については、女子学生では、実習先で「女だから」と生徒に甘く見られた、体育の内容が違う（男子の方が高度なことをする）、部活動で対等に扱ってもらえない、先生に「女子は短パンになるな」と言われたことがある、出席簿が男子が先、という記述が見られた。一方男子学生では、体育の内容が違う、男子だけ先生にたたかれる、などがあげられていた。

田中の調査結果を見ると、「よくある」「ときどきある」を合わせた回答は、女子が41.0%、男子が13.7%

表16-1 女・男に生まれて不条理だと感じたこと（学校） 人(%)

	よくある	ときどきある	全くない
女子学生	8(3.5)	39(17.0)	183(79.5)
男子学生	2(2.0)	6(6.0)	92(92.0)
合計	10(3.0)	45(13.6)	276(83.4)

であった。大学生では男女とも減少しており、女子については半分になっている。

[家庭における経験]

次に、家庭についての結果を見ていく。結果は表16-2に示す。「よくある」「ときどきある」を合わせると、女子学生が23.9%、男子学生が4.0%となり、男女の間で20%程度の開きがある。学校における結果と比べると、女子はわずかに増加しており、男子は逆に減少している。内容の記述を見ると、女子学生では、弟は自由にしろと言われていたのに自分だけ親に将来を決めつけられる、男子の方が帰宅時間が遅くてよい、家事を多く手伝われる、弟と同じ行動をしたのに自分だけ注意された、外で野球やサッカーをしてはだめと言われた、異性の兄弟と扱いが違う、などがあげられており、男子学生では、女子は運動ができなくてもよいと言われる、しっかりしろと事あるごとに言われる、という記述が見られた。

田中の調査では、「よくある」「ときどきある」と答えた生徒は、女子が41.1%、男子学生が5.6%となっており、学校と同じく、大学生になると男女とも減少している。

表16-2 女・男に生まれて不条理だと感じたこと（家庭）人（%）

	よくある	ときどきある	全くない
女子学生	9(3.9)	46(20.0)	175(76.1)
男子学生	1(1.0)	3(3.0)	96(96.0)
合計	10(3.0)	49(14.8)	272(82.2)

[異性との関わりにおける経験]

異性との関わりについての結果は表16-3に示す。「よくある」「ときどきある」と答えた学生は、女子学生では30.7%、男子学生は9.0%となり、学校・家庭と比べて男女とも増加しており、特に女子学生の増加の割合が高い。内容については、女子学生では、力で男性にかなわない、女だからできないと決めつけられる、家事をさせられる、性的関係を強要される、妊娠するのは女性だけ、生活が乱れてくると「女のくせに」と言われる、細かいことを言うといやがられる、「女のくせに」と言われる、などの記述が見られた。男子学生では、「男なんだから」とよく言われる、力仕事を頼まれる、などがあげられていた。

田中の調査での「友達との関わりの中で」の結果では、「よくある」「ときどきある」と答えた生徒は女子が29.4%、男子は6.0%であり、大学生女子はほぼ変化がなく、男子は少し増加している。

表16-3 女・男に生まれて不条理だと感じたこと（異性とのかかわり）人（%）

	よくある	ときどきある	全くない
女子学生	15(6.5)	56(24.2)	160(69.3)
男子学生	1(1.0)	8(8.0)	91(91.0)
合計	16(4.8)	64(19.3)	252(75.9)

[その他の場面における経験]

最後に、学校・家庭・異性とのかかわり以外の場面での経験を見ていく。結果は表16-4の通りである。同様に「よくある」「ときどきある」と答えた学生を合わせると、女子学生が30.5%で「異性とのかかわり」と同じく高い割合になり、男子学生では16.5%と、学校・家庭・異性とのかかわりに比べると10%ほど増加していることが注目される。内容の記述を見てみるとアルバイトや就職活動に関するものが目立つ。内容は、女子学生では、女性のアルバイトは顔がよくなくてはいけない、男にしかできないバイトが多い、女だからという理由で責任ある仕事を任せてもらえない、就業時間に差がある、バイトの制服がスカートである、仕

事の役割が男女で決められている、男性だったらいろいろな職種に挑戦できると思う、年をとったとき男は渋くていいが女はおばさんと言われる、などの記述があった。それに対し男子学生では、女性だけができるバイトが多い、男性の養護教諭の採用が少ない、男は夜勤がある、自動車学校の教官が女性にだけ優しい、女性は怒られない、女性特有のアルバイトは時給が高い、などの記述が見られた。

表16-4 女・男に生まれて不条理だと感じたこと（その他）人（%）

	よくある	ときどきある	全くない
女子学生	13(5.8)	55(24.7)	155(69.5)
男子学生	10(10.3)	6(6.2)	81(83.5)
合計	23(7.2)	62(19.3)	236(73.5)

全体を通して考察してみると、大学生は、学校や家庭からは性別という枠組みで見られることが少なくなっても、逆にその他の場面ではまた「女」「男」という自分の性別を必要以上に意識していると言える。また、どの場面でも女子学生の方が自分の性によって否定的な経験をしたと答えている学生が多い。

次に、女または男に生まれてよかったと思うかどうかを質問した。5つの選択肢があり、それぞれそう思う理由を記述してもらった。結果は表17の通りである。

女子学生は「どちらかといえばよかった」という回答が35.6%で最も多く、「非常によかった」と合わせると58.0%になり、約6割が自分の性を肯定的にとらえている。「非常によかった」と回答した男子学生は40.8%で、「どちらかといえばよかった」と合わせると54.1%となり、男子学生も半数以上が自分の性を肯定的にとらえている。しかし、「非常によかった」だけを見てみると、女子学生の22.4%に対し男子学生は40.8%と倍近くになっている。また、女子学生の理由を見てみると「楽だから」「守ってもらえるから」といった記述も多く、積極的に肯定しているのかという疑問も残る。

「どちらかといえば異性に生まれたかった」「絶対異性に生まれたかった」と回答した学生は、女子学生が12.2%、男子学生は3.1%と、男女で10%近い差が見られる。これは、前の問で見たように女子学生の方が自分の性によって否定的な経験をすることが多いということと関係していると考えられる。異性に生まれたかった理由についても「男性は差別されないから」と答えている学生がいた。

「どちらでもよい」と答えた学生を見てみると、女子学生が29.8%、男子学生が42.8%と男女とも高く、男子学生については5項目中で最も高い割合である。どちらでもよいと答えた理由を見てみると、「どちらの性に生まれても自分は自分だから」という記述と「深く考えたことがない」という二つの理由に分けることができる。

田中の調査では「女または男に生まれてよかったと思うことがあるか」という質問をしている。「よくある」「ときどきある」と答えた生徒は、女子が60.9%、男子が32.9%であり、これと比較すると大学生男子の割合が少し高い。理由については高校生と大学生では大きな変化はないようである。

表17 女または男に生まれてよかったと思うか

	非常によかった	どちらかといえばよかった	どちらかといえば異性	絶対異性	どちらでもよい
女子学生	51(22.4)	81(35.6)	27(11.8)	1(0.4)	68(29.8)
男子学生	40(40.8)	13(13.3)	3(3.1)	0(0.0)	42(42.8)
合計	91(27.8)	94(28.7)	30(9.2)	1(0.3)	111(34.0)

「女または男に生まれてよかった」「異性に生まれたかった」「どちらでもよい」と答えた理由について見ていくと、「女または男に生まれてよかった」は、女子学生では、大切に扱われるから、異性に生まれたかったと思っても仕方がない、今の自分は女性であるからこそ存在しているから、守られる立場だから、女性の方が精神的に強い、レディースバックがある、男に生まれた自分を想像できない、男性ほど将来を気にしないでよい、いろいろできなくても許してもらえることが多い、マラソンの距離が短い、おしゃれができる、女性であることに不自由していない、出産ができる、などがあげられていた。

男子学生では、男性の方が身体能力が高い、男は自分のしたいことが自由にできる、出産しなくてよい、気楽である、男性であることに満足している、今が楽しいから、生理がない、痴漢に遭わない、男性であることが今の自分の基礎だから、スポーツができる、女はいろいろと大変だから、服にお金がかからない、という記述があった。

それに対して「異性に生まれたかった」は、女子学生では、生理や出産がない、男性の方が体力がある、男性の方が友達関係がさっぱりしている、サッカーをしたかったから、親が過保護なのが嫌だから、男性は差別されないから、という記述が見られ、男子学生では、女性の方が何かと特、という記述があった。また、「どちらでもよい」は、女子学生では、自分は自分だから、どっちもどっちだから、あまり深く考えたことがない、どちらでもそれなりに楽しく生きられる、などの記述が見られた。男子学生では、男も女もそれぞれよさがある、自分は自分だから、気にしたことがない、結局は無駄物ねだりになるから、などの理由があげられていた。

④ 理想の女性像・男性像

自分の理想の女性像・男性像の設問ではどちらも同じ10個の項目から、それぞれ理想的だと思う順に3つ以内で回答してもらった。

まず、順番を問わずに集計した結果を、女性像は表18-1に、男性像は表19-1に示す。また、順位をつけて回答してもらったため、1番目に理想的だと思うものは3点、2番目は2点、3番目は1点として、項目ごとに点数を計算し順位づけした結果をそれぞれ表18-2、表19-2に示す。点数は男女の人数比に対応させ、男子学生側の点数を2.3倍にしてある。

表18-1 理想の女性像（3つまで）

（単位：人）

	素直	みんなを まとめる	やさしい	自分の考 えを主張	かわい らしい	スタイル や格好	頼りに なる	明るく 活発	たくま しい	その他
女子学生	117	27	177	88	82	13	31	108	12	5
(%)	50.4	11.6	76.3	37.9	35.3	5.6	13.4	46.6	5.2	2.2
男子学生	64	4	76	28	47	13	8	44	2	5
(%)	62.7	3.9	74.5	27.5	46.1	12.7	7.8	43.1	2.0	4.9
合計	181	31	254	116	129	27	39	152	14	10
(%)	54.2	9.3	76.0	34.7	38.6	8.1	11.7	45.5	4.2	3.0

表18-2 理想の女性像（順位）

	女子学生	点	男子学生	点
1	やさしい	399	やさしい	416
2	素直	254	素直	347
3	明るく活発	185	かわいらしい	202
4	自分の考えを主張	180	明るく活発	151
5	かわいらしい	165	自分の考えを主張	112
6	頼りになる	54	スタイルや格好	52
7	みんなをまとめる	50	頼りになる	27
8	スタイルや格好	19	その他	20
9	たくましい	19	みんなをまとめる	11
10	その他	11	たくましい	11

まず理想の女性像について表18-1を見ると、男女ともに「やさしい人」と回答する学生が最も多く、女子学生では76.3%、男子学生は74.5%と7割以上である。次いで多いのが「素直な人」で、女子学生50.4%、男子学生62.7%と男女で10%以上の差が出ている。表18-2の点数を見てみると、同じ2位ではあるが100近い開きがあり、男女の意識の差が見られる。3番目は女子学生が「明るく活発な人」、男子学生が「かわいらしい人」となっていて、「明るく活発な人」は女子46.6%、男子43.1%であり、あまり差は見られないが、「かわいらしい人」では女子35.3%、男子46.1%と、男女の間で10%程度のひらきがある。男子学生では3位になっている「かわいらしい人」が女子学生では5位となっていることから、女子学生が考える理想の女性像と、男子学生が考える理想の女性像にずれがあることがわかる。

また、男性の特性であると言われることが多い項目について見てみると、「自分の考えが主張できる人」は女子37.9%、男子27.5%と男女で10%程度の差があり、女子学生については「かわいらしい人」の35.3%よりも高くなっている。「みんなをまとめることができる人」は女子11.6%、男子3.9%、「頼りになる人」は女子13.4%、男子7.8%と、それぞれ男女の間で開きがある。順位と点数で見ても差があり、男女の意識に差があることがわかる。

全体的に見て、「素直」「かわいらしい」「スタイルや格好がよい」といった項目では男子学生の方が高く、男子の特性であるといわれている「自分の考えが主張できる」「みんなをまとめることができる」「頼りになる」といった項目については女子学生の方が高いと言える。

表19-1 理想の男性像（3つまで）

（単位：人）

	素直	みんなをまとめる	やさしい	自分の考えを主張	かわいらしい	スタイルや格好	頼りになる	明るく活発な	たくましい	その他
女子学生	49	51	106	129	3	12	177	84	55	6
(%)	21.1	22.0	45.7	55.6	1.3	5.2	76.3	36.2	23.7	2.6
男子学生	20	34	29	45	4	5	54	25	29	4
(%)	19.6	33.3	28.4	44.1	3.9	4.9	52.9	24.5	28.4	3.9
合計	63	85	136	174	7	17	231	109	74	10
(%)	18.9	25.4	40.7	52.1	2.1	5.1	69.2	32.6	22.2	3.0

表19-2 理想の男性像（順位）

	女子学生	点	男子学生	点
1	頼りになる	397	頼りになる	296
2	やさしい	246	自分の考えを主張	249
3	自分の考えを主張	245	みんなをまとめる	201
4	明るく活発	136	やさしい	168
5	みんなをまとめる	98	素直	134
6	素直	96	たくましい	128
7	たくましい	89	明るく活発	109
8	スタイルや格好	19	その他	21
9	その他	12	かわいらしい	18
10	かわいらしい	6	スタイルや格好	18

次に理想の男性像について見ていく。表19-1を見ると、最も多いのは男女ともに「頼りになる人」であるが、女子学生は76.3%、男子学生は52.9%と、男女で大きく差がある。表19-2の点数を見ても、100程度の開きがあり、女子学生の方が圧倒的に男性に頼りがいを求めていると言える。男女とも次に多かった回答は「自分の考えが主張できる人」で、女子55.6%、男子44.1%と、男女で10%程度の差が出ている。しかし、点数を見ると男女で差は見られないことから、男子学生でこの項目を選んだ人の多くが、「自分の考えが主張できる」ことを高い順位に位置づけていることになる。3番目には女子学生が「やさしい人」、男子学生が「みんなをまとめることができる人」をあげているが、「やさしい人」は、女子45.7%、男子28.4%で女子学生の方がかなり多く、「みんなをまとめることができる人」は女子22.0%、男子33.3%で男子学生の方が高くなっている。順位と点数でも、「やさしい人」は女子学生が246点で2位、男子学生が168点で4位、「みんなをまとめることができる人」は女子学生が98点で5位、男子学生が201点で3位となっており、女子学生が考える理想の男性像と、男子学生が考える理想の男性像にずれがあると言える。田中の調査にも「自分が目指す特性と好ましい異性像」という質問があったので見てみると、女子が仲良くしたい異性像で「やさしい人」という回答は52.8%であるのに対して、男子生徒が目指す特性で「やさしい人」と答えたのは26.2%と、高校生と大学生で同様の結果が出ていた。

「明るく活発な人」について見てみると、女子学生の方が10%以上高く、順位も女子が4位、男子が7位となっている。また、「たくましい人」は、男子学生の方が多く、点数でも89点と128点で男子が高くなっていることから、男女の意識に差があることがわかる。

また、「その他」と答えた学生の記述の内容は、女性像・男性像それぞれ同じであることが多かったので、まとめて記すと、女子学生では、かしこい人、人の気持ちを理解できる人、自分の信念を持っている人、という内容が見られた。男子学生では、自己をしっかりと確立している人、髪を染めていない人、スポーツが好きな人、などがあげられていた。

4. 結婚と就労への考え方

ここでは、大学生の結婚に対する考え方や、結婚後の夫婦の在り方、育児休業の問題も含めた就労についての考え方について見ていく。

① 結婚についての考え

まず、大学生が結婚についてどのように考えているのかを聞いてみた。結果は表20の通りである。最も多いのは「是非したい」であり、女子58.3%、男子72.8%で、男女差がある。「よい相手がいなければ結婚しなくてもよい」と答えた学生は女子32.2%、男子21.2%と、やはり男女の差がみられる。全体として男性の方が結婚志向が強いと言える。

田中の調査では「是非したい」と答えた高校生は女子が62.3%、男子が53.8%であり、大学生になると女子は少し減少しているが、男子については大きく増加している。逆に「よい相手がいなければ結婚しなくてもよい」と答えた生徒は女子が30.1%とあまり変化はないが、男子は35.7%なので大きく減少している。「あまりしたくない」という回答はほぼ変化していない。

また、「あまりしたくない」「絶対したくない」と答えた学生には、その理由も書いてもらった。女子学生では、自分の人生を犠牲にしたくない、好きな仕事をやりたい、結婚が人生の全てではないから、めんどくさい、意味がない、よい相手がいても結婚という形にこだわることはないから、などの理由があげられていた。男子学生では、特に興味がない、魅力を感じない、結婚生活を想像できない、考えたことがない、自由に生きたい、といった理由があげられていた。この内容から、結婚したくないと考える学生は、結婚に対してよいイメージを持っていないことがうかがえる。

表20 将来結婚したいと思うか 人 (%)

	是非したい	よい相手がいなければ しなくてもよい	あまりしたくない	絶対したくない	その他
女子学生	134(58.3)	74(32.2)	9(3.9)	3(1.3)	10(4.3)
男子学生	72(72.8)	21(21.2)	3(3.0)	0(0.0)	3(3.0)
合計	207(62.8)	95(28.8)	12(3.6)	3(0.9)	13(3.9)

② 結婚後の働き方についての考え

次に、大学生が結婚後の女性・男性の働き方についてどのように考えているのかについて聞いた。まず、女性の働き方についての結果は表21の通りである。最も多かったのは「子どもができたときに育児休業をとるが、ずっと働き続ける」という回答で、女子40.1%、男子37.3%と約4割である。次に多かったのが「子どもができたときに仕事をやめて、子どもが大きくなったらまた働く」で、女子27.8%、男子25.3%である。全体的に大きな男女差はなく、女子学生が望む結婚後の働き方と、男子学生が将来の結婚相手に望む働き方に対する考えはほぼ一致している。

表21 結婚後の女性の働き方 人 (%)

	ずっと働き 続ける	育児休業をと るが、働き続 ける	子どもができ たら辞めて、 また働く	結婚か子ども ができたとき に辞める	仕事はもたな い	わからない	その他
女子学生	21(9.1)	92(40.1)	64(27.8)	12(5.2)	0(0.0)	29(12.9)	12(5.2)
男子学生	6(6.1)	37(37.3)	25(25.3)	3(3.0)	0(0.0)	11(11.1)	17(17.2)
合計	27(8.2)	129(39.1)	89(27.0)	15(4.5)	0(0.0)	40(12.1)	30(9.1)

田中の高校生の調査では、最も多い回答は「子どもができたときに仕事を辞めて、子育てが終わったら、また働く」で、女子56.2%、男子29.4%となっている。田中の調査の質問項目に「育児休業制度を利用する」がなかったため、正確な比較はできない。また、高校生の男子で最も多かった回答は「わからない」の32.2%であったが、男子大学生では「わからない」は17.2%に減少している。

男性の働き方についての結果は表22に示す。最も多かったのは「仕事を中心に考えるが、家事や育児もできる限り手伝う」で、女子55.3%、男子51.0%と男女とも半数以上である。次いで「家事や育児を妻と平等に負担しながら、仕事をする」が女子31.7%、男子38.8%と、意識の上では男子学生の方が男性が家事をすることに積極的である。

表22 結婚後の男性の働き方

人 (%)

	家事や育児は妻にまかせる	家事や育児もできる限り手伝う	家事や育児は妻と平等に負担する	仕事はもたない	わからない	その他
女子学生	4(1.7)	127(55.3)	73(31.7)	1(0.4)	16(7.0)	9(3.9)
男子学生	1(1.0)	50(51.0)	38(38.8)	0(0.0)	3(3.1)	6(6.1)
合計	5(1.5)	177(53.8)	111(33.7)	1(0.3)	19(5.8)	16(4.9)

高校生では「仕事を中心に考えるが、家事や育児もできる限り手伝う」が女子67.8%、男子62.3%であり、大学生はそれぞれ10%程度減少している。一方で「家事や育児を妻と平等に分担しながら、仕事をする」は女子23.3%、男子28.0%であり、これは逆に大学生で増加している。

また、「その他」という回答の内容を見ると、女子学生では、それぞれの家庭による、状況による、といった記述が見られ、男子学生では、二人で話し合っ決めて、その人の意志でよい、相手の希望にまかせる、育児休暇を取る（男性の働き方）、などがあげられていた。

③ 育児休業制度の利用

次に、自分に子どもができたなら育児休業制度を利用したいかどうかを質問した。「あまり利用したくない」「絶対利用したくない」と答えた学生には、どうして利用したくないのかという理由も記述してもらった。また、「是非利用したい」「必要があれば利用したい」と答えた学生については、誰が育児休業をとるのが望ましいと思うかも質問した。

結果を表23に示す。「是非利用したい」が最も多く、女子55.0%、男子37.8%であり、男女で20%近い差がある。女子学生の方が育児休業制度を利用することによって仕事を続けたいという意志が強いと思われる。「必要があれば利用したい」と合わせると、女子90.9%、男子87.7%と男女とも非常に高い割合になる。一方で、少数だが「あまり利用したくない」「絶対利用したくない」と答えた学生もいた。理由を見てみると、女子学生では、それをきっかけに仕事を失いたくない、復帰が大変そう、現状のままでは期間が短いため休業できる期間をもっと長くしてくれなければ利用できない、勤務先の仕事のやりがいによる、結婚した時点で仕事を辞めるので必要ない、などがあげられていた。男子学生では、男は働いて稼ぐ、育児休業をとっては職場でやっていけない、手続きが大変そうである、といった記述があった。

表23 子どもができれば育児休業制度を利用したいか 人 (%)

	是非利用したい	必要があれば利用したい	あまり利用したくない	絶対利用したくない	わからない	その他
女子学生	127(55.0)	83(35.9)	4(1.7)	1(0.4)	14(6.1)	2(0.9)
男子学生	37(37.8)	49(49.9)	4(4.1)	0(0.0)	8(8.2)	0(0.0)
合計	164(49.7)	133(40.3)	8(2.4)	1(0.3)	22(6.7)	2(0.6)

次に、誰が育児休業をとるのが望ましいと思うかを、前の質問で「是非利用したい」「必要があれば利用したい」と答えた学生に聞いた。結果は表24の通りである。「二人で話し合っ決めて」が最も多く、女子66.5%、男子77.3%とやや男女差が見られた。その分、「妻がとるのが望ましい」は女子29.2%、男子17.9%で、女子学生の方が10%以上高くなっている。女子学生の中に「自分の子どもは自分で育てたい」と思っている学生が多いのであろうか。

表24 誰が育児休業をとるのが望ましいと思うか 人 (%)

	妻がとるのが望ましい	夫がとるのが望ましい	二人で話し合っ決めて	その他
女子学生	61(29.2)	1(0.5)	139(66.5)	8(3.8)
男子学生	15(17.9)	1(1.2)	65(77.3)	3(3.6)
合計	76(25.9)	2(0.7)	205(69.7)	11(3.7)

5. ジェンダーに関する授業体験と男女平等についての認識の関連

ここでは、これまでに男女平等に関する授業を受けた経験の有無が、大学生のジェンダーに対する考え方にどの程度影響しているのかを見ていく。

① 男女平等に関する授業を受けた経験

まず、小学校から大学までの中で、男女平等に関する授業を受けたことがあるかどうか質問した。「ある」場合には、授業を受けた時期、教科名、その授業の内容と自分への影響を記述してもらった。

結果は、表25の通りである。「ある」と答えた学生は、女子が46.3%であるのに対して、男子が34.4%と男女で10%以上の差がある。「ない」と答えた学生の中には、過去に男女平等に関する授業を受けた経験があっても、それを忘れてしまっている場合も含まれていると思われる。

表25 男女平等に関する授業を受けたことがあるか 人 (%)

	あ る	な い
女子学生	107(46.3)	124(53.7)
男子学生	32(34.4)	61(65.6)
合計	140(43.1)	185(56.9)

男女平等に関する授業を受けた時期については、表26に示した。小学校・中学校・高校・大学という4つに分けて見てみると、女子は「高校」が53.7%で最も多く、中学校43.1%、大学34.8%、小学校15.8%と続く。一方男子は、最も多いのが「大学」の46.4%で、中学校と高校が39.3%、小学校10.7%であった。

表26 男女平等に関する授業を受けた時期（複数回答）

（単位：人）

	小学1 ～3年	小学4 ～6年	中学 1年	中学 2年	中学 3年	高校 1年	高校 2年	高校 3年	大学 1年	大学 2年	大学 3年	大学 4年
女子学生	0	15	2	18	21	12	24	15	13	15	2	3
(%)	0.0	15.8	2.1	18.9	22.1	12.6	25.3	15.8	13.7	15.8	2.1	3.2
男子学生	0	3	1	4	6	6	4	1	2	11	0	0
(%)	0.0	10.7	3.6	14.3	21.4	21.4	14.3	3.6	7.1	39.3	0.0	0.0
合計	0	18	3	22	27	18	28	16	16	26	2	3
(%)	0.0	14.5	2.4	17.7	21.8	14.5	22.6	12.9	12.9	21.0	1.6	2.4

授業が行われた教科とその内容、そしてその授業が与えた自分への影響について記述してもらった。教科と内容は以下の通りであるが、内容についてはあまり覚えていない学生が多いようで、記述は少なかった。

〈教科〉

- 小学校・・・家庭科，社会，保健，道徳
- 中学校・・・家庭科，社会（公民，日本史），保健，LHR
- 高校・・・家庭科，社会（政経，日本史，倫理，現代社会）
- 大学・・・小学家庭科教育法，性教育学，生活一般，生活科研究入門，医学概論，教育原論，教育相談

〈内容〉

日本史で昔の参政権における男女差別について学んだ（中学1年，社会）。男女で育児休業のとりやすさが違うということ（高校3年，家庭科）。「男らしい」「女らしい」という特性が，国や文化によって違うということ（高校2年，社会）。「ジェンダー・フリー」等，新しい用語を教わった。（高校2年，家庭科）。グループに分かれて，「男女平等とは何か」「どこまで平等にするべきか」などについて話し合った（高校1年，家庭科）。「男女平等」について討論するため，グループに分かれて図書館やインターネットでいろいろなことを調べた（中学2年，家庭科）。性別役割分業について話し合った（中学2年，家庭科）。労働条件の差について学んだ（高校1年，社会）。

教科について見てみると，小学校から大学までを通して多かったのが家庭科であった。社会科の授業でもさまざまな分野で男女平等についてふれているようだが，授業の流れの中で，参政権をはじめとする昔の女性の立場の弱さや，現代の女性の社会進出などについての内容を教えているだけのことが多いようで，男女平等に関して本格的にとりあげているのかどうかの判断は難しい。一方で家庭科の授業では，ある一定の時間を使って男女平等について生徒に考えさせたり，討論させるといった生徒主体型の授業が行われることも多いようで，そのような授業の経験は今でもしっかりと記憶に残っているようである。また，大学における授業でも多かったのは小学家庭科教育法であった。養護教諭養成課程の学生では，医学概論と答えている学生が多かった。

続いて、男女平等に関する授業が学生たちに与えた影響についての記述を以下に述べる。

○女子学生

男女の役割を考えるいい機会になった（中学2年，家庭科）．自分の考えは正しかったんだと思えた（中学2年，家庭科）．特に影響はなかった（高校2年，社会）．理想と現実は違うと思った（高校3年，家庭科）．

○男子学生

自分が以前から考えていたことと同じだったので特に影響はなかったが，自分の考えに確信を持てた（高校2年，家庭科）．昔と今との比較で，現状を知ることができた（中学1年，社会）．男女平等を考えるきっかけとなった（高校1年，家庭科）．特に影響はなかった（高校1年，社会）．

以上の記述からわかるように，学生たちの反応は二分化できる．先にも述べたように，家庭科では効果的な授業を取り入れていることが多いようで，そのような授業を受けた経験のある学生は，その経験を肯定的にとらえており，アンケート全体を通してても他の学生よりも記述の量が多かった．しかし一方で，自分への影響について記述していない学生が圧倒的に多く，これらの学生は男女平等に関する授業を受けても特別な影響は受けなかったと感じているようである．

② 男女平等に関する授業体験とジェンダーに対する考えの関連

では，男女平等に関する授業は，実際にはどの程度学生たちのジェンダーに対する考え方に影響するのだろうか．男女平等に関する授業を受けた経験と，学生たちの男女平等への認識をクロスさせ，関連があるかどうか見ていく．問24で男女平等に関する授業を受けたことが「ある」と答えた学生を①グループ，「ない」と答えた学生を②グループとする．

まず，問1の「ジェンダー」という言葉を知っているかどうかの結果とクロスさせた結果を表27に示す．「聞いたことがあり意味も知っていた」と答えた学生は，女子学生が①グループでは80.5%，②グループでは72.6%，男子学生が①グループでは68.7%，②グループでは62.3%であり，男女とも男女平等に関する授業を受けた経験がある学生の方がやや高くなっている．

表27 授業体験と「ジェンダー」理解の関連

①「ある」

人 (%)

	意味も知っていた	意味までは知らなかった	意味を間違って認識していた	知らなかった
女子学生	86(80.5)	13(12.1)	1(0.9)	7(6.5)
男子学生	22(68.7)	8(25.0)	0(0.0)	2(6.3)
合計	109(77.9)	21(15.0)	1(0.7)	9(6.4)

②「ない」

人 (%)

	意味も知っていた	意味までは知らなかった	意味を間違って認識していた	知らなかった
女子学生	90(72.6)	28(22.6)	1(0.8)	5(4.0)
男子学生	38(62.3)	16(26.2)	3(4.9)	4(6.6)
合計	128(69.1)	44(23.8)	4(2.2)	9(4.9)

問2の「男女共同参画社会基本法」について知っているかという質問との関連も見てみる。結果は表28の通りである。「聞いたことがあり内容も知っていた」と答えた学生は、女子学生が①38.4%、②24.2%とグループ間で大きく違いが出ていたが、男子学生については①25.0%、②23.0%とあまり差は見られなかった。「知らなかった」と答えた学生を見ると、女子学生は①24.3%、②36.3%で、授業を受けた経験のない学生の方が多かったが、男子学生では①46.9%、②39.3%と、①グループの方が多かった。このことから、女子学生に関しては、授業を受けたことによりこの問題に関心を持った学生が男子学生よりも多く、そのことが基本法の内容に対する関心にもつながっていると考えられる。

表28 授業体験と「男女共同参画社会基本法」認知の関連

①「ある」 人 (%)

	内容も知っていた	内容までは知らなかった	内容を間違っ て認識 していた	知らなかった
女子学生	41(38.4)	36(33.6)	4(3.7)	26(24.3)
男子学生	8(25.0)	9(28.1)	0(0.0)	15(46.9)
合計	50(35.7)	45(32.1)	4(2.9)	41(29.3)

②「ない」 人 (%)

	内容も知っていた	内容までは知らなかった	内容を間違っ て認識 していた	知らなかった
女子学生	30(24.2)	46(37.1)	3(2.4)	45(36.3)
男子学生	14(23.0)	21(34.4)	2(3.3)	24(39.3)
合計	44(23.8)	67(36.2)	5(2.7)	69(37.3)

次に、問3の「男女平等や男女共同参画社会について考えたことがあるか」という質問とのクロス結果を表29に示す。「ある」と答えた学生は、女子学生が①70.1%、②46.8%、男子学生が①68.7%、②50.8%となり、男女とも①グループと②グループの間で大きな差がある。男女平等に関する授業を受けたことが、男女平等について考えたり問題意識を持つことにつながっていると言える。

表29 授業体験と男女平等への問題意識の関連

①「ある」		人 (%)		②「ない」		人 (%)		
	あ	る	な	い		あ	る	
女子学生	75	(70.1)	32	(29.9)	女子学生	58	(46.8)	
男子学生	22	(68.7)	10	(31.3)	男子学生	31	(50.8)	
合計	97	(69.3)	43	(30.7)	合計	89	(48.1)	
							96	(51.9)

では、いろいろな分野における男女平等についての認識と、男女平等に関する授業を受けた経験に関連はあるのだろうか。問5の「学校」と「家庭」については両グループであまり差は見られなかった。問5の「政治の場」とのクロス結果は、表30-1に示す。女子学生はグループによる差は見られないが、「平等」と答えた男子学生は、①グループが3.1%であるのに対して、②グループが21.7%である。逆に「男性の方が優遇されている」「どちらかといえば男性の方が優遇されている」と答えた男子学生は①93.8%、②73.3%となっており、①グループの男子学生の9割以上が政治の場では男性が優遇されているととらえていることがわかる。①グループの方が現実をリアルに認識していると言えよう。

表30-1 授業体験と男女平等の実態認識（政治の場について）との関連

①「ある」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	53(50.0)	43(40.6)	5(4.7)	0(0.0)	0(0.0)	5(4.7)
男子学生	18(56.3)	12(37.5)	1(3.1)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.1)
合計	71(51.1)	56(40.3)	6(4.3)	0(0.0)	0(0.0)	6(4.3)

②「ない」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	65(52.5)	46(37.1)	7(5.6)	1(0.8)	0(0.0)	5(4.0)
男子学生	25(41.6)	19(31.7)	13(21.7)	0(0.0)	0(0.0)	3(5.0)
合計	90(49.0)	65(35.3)	20(10.9)	1(0.5)	0(0.0)	8(4.3)

続いて、問5の「社会通念・習慣・しきたり」とのクロス結果を表30-2に示す。「政治の場」の結果と同様、女子学生の認識にはグループによる違いがほとんど見られないが、男子学生では、「政治の場」と同様の傾向が見られた。

表30-2 授業体験と男女平等の実態認識（社会通念等について）との関連

①「ある」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	33(30.8)	53(49.7)	13(12.1)	1(0.9)	0(0.0)	7(6.5)
男子学生	12(37.5)	15(46.8)	3(9.4)	0(0.0)	0(0.0)	2(6.3)
合計	45(32.1)	69(49.4)	16(11.4)	1(0.7)	0(0.0)	9(6.4)

②「ない」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	43(34.7)	55(44.3)	13(10.5)	0(0.0)	0(0.0)	13(10.5)
男子学生	15(24.6)	25(40.9)	17(27.9)	2(3.3)	0(0.0)	2(3.3)
合計	58(31.4)	80(43.2)	30(16.2)	2(1.1)	0(0.0)	15(8.1)

問5の「法律や制度」とのクロス結果は、表30-3の通りである。「平等」と答えた学生を見てみると、女子学生は①57.6%、②46.8%であり、10%程度の開きが見られ、授業を受けた経験のある学生の方が「法律や制度」は平等であるという評価をしている。一方、男子学生は①46.8%、②56.7%となっており、女子

学生とは逆の結果が見られる。授業体験が、女子学生の場合は「法律や制度」と現実とのギャップに目を向けさせ、男子学生には「法律や制度」への評価の目を鋭くさせていると考えられる。

表30-3 授業体験と男女平等の実態認識（法律や制度について）との関連

①「ある」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	6(5.7)	26(24.5)	61(57.6)	3(2.8)	1(0.9)	9(8.5)
男子学生	1(3.1)	9(28.1)	15(46.8)	2(6.3)	2(6.3)	3(9.4)
合計	7(5.0)	35(25.2)	76(54.6)	5(3.6)	3(2.2)	13(9.4)

②「ない」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	13(10.5)	36(29.0)	58(46.8)	3(2.4)	0(0.0)	14(11.3)
男子学生	2(3.3)	15(25.0)	34(56.7)	6(10.0)	0(0.0)	3(5.0)
合計	15(8.2)	51(27.7)	92(50.0)	9(4.9)	0(0.0)	17(9.2)

最後に、問5の「職場」とのクロス結果を見ていく。結果は表30-4の通りである。女子学生はグループによる意識の差はそれほど見られないが、男子では、「政治の場」「社会通念・習慣・しきたり」と同様の傾向が認められる。

表30-4 授業体験と男女平等の実態認識（職場について）との関連

①「ある」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	31(29.0)	61(57.1)	7(6.5)	1(0.9)	0(0.0)	7(6.5)
男子学生	12(37.5)	14(43.6)	2(6.3)	2(6.3)	0(0.0)	2(6.3)
合計	43(30.7)	76(54.4)	9(6.4)	3(2.1)	0(0.0)	9(6.4)

②「ない」

人 (%)

	男性の方が優遇されている	どちらかといえば男性が優遇	平 等	どちらかといえば女性が優遇	女性の方が優遇されている	わからない
女子学生	42(33.9)	60(48.3)	11(8.9)	2(1.6)	0(0.0)	9(7.3)
男子学生	9(14.8)	30(49.2)	15(24.6)	0(0.0)	1(1.6)	6(9.8)
合計	51(27.6)	90(48.6)	26(14.1)	2(1.1)	1(0.5)	15(8.1)

6. 教育大学における講義開設の必要性

次に、大学、特に教育大学において「男女平等」に関する講義を開設する必要があるかどうかを質問した。質問文の最初には、「教師の考え方が子どものジェンダー観の形成に大きく影響するので、私は、教員養成課程を設けている大学では『男女平等』に関する講義を開設するべきだと考えています。」という一文をつけている。結果は、表31の通りである。

表31 教育大学において男女平等に関する講義を開設する必要性 人 (%)

	開設するべきだ	特に開設する必要はない	わからない	その他
女子学生	132(57.9)	17(7.5)	71(31.1)	8(3.5)
男子学生	58(60.5)	17(17.7)	20(20.8)	1(1.0)
合計	191(58.7)	34(10.5)	91(28.0)	9(2.8)

「開設するべきだ」という回答が最も多く、女子学生57.9%、男子学生60.5%と、男女とも6割程度の学生が講義開設に積極的な考えを持っている。一方で、「特に開設する必要はない」は、女子学生が7.5%であるのに対し、男子学生が17.7%で、男女間で10%程度の開きがある。また、「その他」の内容を見ると、「講義の内容による」など条件付きで開設という意見もあった。詳しい記述内容は、女子学生では、自由選択科目としてなら開設してもよい、講義の内容による、あったら受けたいと思う、ジェンダーについての考えが偏っていない教官がやるなら開設したほうがいい、あってもなくてもどちらでもよい、などの意見があった。男子学生では、一方的に話を聞くのではなく学生が中心になって話し合うような講義ならば開設するべき(聞くだけの講義は興味深い講義にならない)、という記述があった。

Ⅲ ま と め

本研究では、教師を目指している大学生が男女平等の実態をどの程度認識しているのか、各人のジェンダー意識はどのように形成されてきたのか、また、これまでに男女平等に関する授業を受けた経験の影響の有無を明らかにする目的でアンケート調査を実施した。結果の概要は以下の通りである。

1. 男女平等についての認識

男女平等について考えたことのある学生は男女とも6割弱であった。学校が「平等」であると考えている学生は7割弱、法律や制度については5割と、他の項目に比べると高く、男女差も見られない。家庭、政治の場、社会通念・習慣・しきたり、職場については「平等」ととらえている学生は少ない。また男女差があり、女子の方が不平等を感じとっている。

2. 家庭教育の実態と性別役割分業意識

家庭で注意されることについては、項目によって男女差が見られ、子どもの性別によって親の関わりが異なっていると言える。家庭で「女、男だから〇〇しなさい」と言われた経験は女子5割弱、男子2割弱と差が大きい。

性別役割分業意識については、「改めるべきだ」との回答は女子7割、男子4割強と、男性の方に保守的な意識が強い。

3. 「女らしさ、男らしさ」の意識と自分の性への考え方

「女らしさ、男らしさ」についての固定的な考えについてどう思うかという質問では、「こだわらずに個人で見るべき」が、女子6割、男子5割強と多数であった。「大事にするべきだ」は、女子2割強、男子3割強と少し差が見られた。しかし、「女らしい、男らしい」「女のくせに、男のくせに」と思ったり言ったりしたことのある学生は、女子5割強、男子3割強であり、女子学生の意識と行動に矛盾が見られると言える。

理想の女性像・男性像についての質問では、女性と男性の回答に差が見られ、固定的な「女らしさ、男らしさ」についての考え方が男性の方に強く影響していると言える。

4. 結婚と就労への考え方

女子学生は6割弱、男子学生では7割強が、結婚に対して積極的な考えを持っている。結婚後の女性の働き方についての考えには男女差はほぼ見られず、男性の働き方について多少の男女差が見られた。「家事や育児を妻と平等に負担しながら、仕事をする」という回答では女子学生が3割強、男子学生が4割弱と、意識の上では男子学生の方に男性が家事をすることに積極的な考えが示された。

育児休業を「是非利用したい」は女子学生が5割強、男子学生が4割弱であった。

5. ジェンダーに関する授業と男女平等についての認識の関連

これまでに男女平等に関する授業を受けたことが「ある」と回答した学生は全体で4割強であったが、男女で1割強の差があり、女子学生の方が多かった。授業を受けた時期は、「高校」が5割強で最も多かった。

男女平等に関する授業を受けた経験が「ジェンダー」に対する考えにどの程度影響しているのかを見た。「ジェンダー」という言葉を正しく認識しているのは、男女とも授業体験がある学生の方が多かった。男女平等や男女共同参画社会について「考えたことがある」割合も同様である。

各分野における男女平等の認識については、男女によって関連が見られる分野に違いがあった。女子学生は「学校」や「家庭」における認識に差が出ているのに対し、男子学生は「政治の場」や「社会通念・習慣・しきたり」「職場」における認識に差が出ていた。

6. 教育大学における講義開設の必要性

教育大学における「男女平等」に関する講義開設に、男女ともに約6割の学生が積極的な考えを持っている。また、講義開設の際に参考になる意見もいくつかあった。

(参考文献は前号に掲載した)

内島 貞雄 (旭川校教授)

小林 純子 (学校法人御西学園 百華幼稚園)